

私見 Tuesday 創見

生まれ故郷である八戸にUターンして、もう10年がたとうとしている。もうすっかり地元民だという自負が出てきた一方で、Uターン前に感じていた田舎を恋い焦がれる気分が、どこを歩いてもエアコンの室外機やら何かのゆで汁の匂いのような匂いがするし、せつなくの早朝の街もゆうべの騒ぎの痕がそのまま残っている。誰かの汗や脂でねっとりした吊革を握りながら、土も草もない街並みを眺めつつけるしかない、そんな日々だった。

持ちも、いまだ変わっていない。それどころか、かつての自分が知らなかった田舎のしあわせを日々発見しては、小躍りしてよんでいる。

思い返せば、都会の暮らしは窮屈で、身体に合わなかった。どこを歩いてもエアコンの室外機やら何かのゆで汁の匂いのような匂いがするし、せつなくの早朝の街もゆうべの騒ぎの痕がそのまま残っている。誰かの汗や脂でねっとりした吊革を握りながら、土も草もない街並みを眺めつつけるしかない、そんな日々だった。

都会に住むだけの財力や縁がないから、仕方なく田舎に住むのではない。田舎が快適だから、田舎に住むことがしあわせだからこそ、自ら選んで住んでいる。

八戸に限らず、田舎に住んでいる人から「人が少ない、この町はダメだ」という声を聞くことが多く、しかし僕にとっては、人がいないことは至極せいたくに思える。

例えば公園。そこかしこに広々とした公園があり、駐車場もあついでいて、すぐに子どもたちが走りだせる。都会の公園には「ボールで

田舎住まいというぜいたく

遊ぶな」「大声を出すな」と横断幕が掲げられているところも少なくないと聞く。公園から発生する問題に直面し、苦勞し耐え忍ぶ人を批判する気持ちは一切ないけれど、もう少しなんとかならなかった

玉樹 真一郎

八戸学院大
地域経営学部特任教授



たまき・しんいちろう
1977年八戸市生まれ。八戸高、東京工業大、北陸先端科学技術大学院大を卒業。2001年、任と企画してゲーム機「Wi i」を企画して担当。退社後にUターンして企画コンサルティング業を営む。著書に「ついでにやろう」体験のつくりかた」など。

人が集まりすぎると、社会全体で子どもを愛し育てたいという気持ちで、公園の別のやり方はなかったか。公園利用者や周辺住民の両方を笑顔にできる方策は、本当に存在しないのか。こういつた悲しい現状は、

人が減っていく中、どうやって地元の盛り上げてほしいのだろうか、と思いがたむ。

「人口ボーナス」という考え方が、若者が増えることで生まれる労働力の増加率が、お年寄りや子どもを含めた全人口の増加率を上回っているとき、経済が大きく発展する」とを指す。

一方、田舎の公園には横断幕どころか何もなし。おそろしくのどかだ。何もなければ、子どもは汗を流して走り回るか、自む遊びを創造する。親は何の心配もなく子どもを自由にさせられる。気兼ねなく、たたく人、人がいなければ、気が楽に感じる。やはり経済は人の数で決まるのだから。

「人口ボーナス」という考え方が、若者が増えることで生まれる労働力の増加率が、お年寄りや子どもを含めた全人口の増加率を上回っているとき、経済が大きく発展する」とを指す。

「人口ボーナス」という考え方が、若者が増えることで生まれる労働力の増加率が、お年寄りや子どもを含めた全人口の増加率を上回っているとき、経済が大きく発展する」とを指す。

「人口ボーナス」という考え方が、若者が増えることで生まれる労働力の増加率が、お年寄りや子どもを含めた全人口の増加率を上回っているとき、経済が大きく発展する」とを指す。